

和歌古典主義時代の脈略と諸相

『中世和歌史論——新古今和歌集以降』

村尾誠一著

青簡舎 二〇〇九年十一月

古典和歌の最高峰である『新古今和歌集』が元久二年（一二〇五）に「竟宴」の形で現れて以降、鎌倉・室町時代、西暦で言えば一三世紀から一五世紀までの二百年の間に、『新勅撰和歌集』（二二三二）から『新続古今和歌集』（二四三三）にかけて、延べ十三部の勅撰和歌集が次々と編纂されていった。この「十三代集」を始めとする中世和歌は、連綿たる山脈の様相を呈している。しかし、それに対する後世の研究は必ずしもその膨大な量と比較するとは限らず、未開拓の分野が多く残されている。その原因は、その先頭に立つ『新古今和歌集』の栄光が輝かしすぎて、人々の注目がそちらに引き付けられてしまうからであり、現実的には、中世和歌の表現は新古今時代に対する継承や模倣の要素が大きく、全体的に垂流的なイメージが払拭できず、それ自体の価値があまり重視されにくいことにも由来するのであろう。

中世和歌史全般を論じるのは並大抵のことではない。いかなる視点で何を選び、そしてどのように論じるか、論者の力量が問われる。

村尾誠一氏の新著『中世和歌史論——新古今和歌集以降』は

正に、中世和歌の脈絡を辿り、その全体的な特質と価値を追求することに挑んだ学術書である。これまで発表された延べ二十本の論文を加筆修正して体系化し、それに書き下ろしの序章と終章を加えた、四百頁以上に及ぶ大著である。そのうち、発表論文の最も早いものは一九八三年にまで遡る。著者三十年来の孜々たる研究蓄積の集大成と言ってもよい。

著者は中世和歌全体を「古典主義の時代」として巨視的に捉えている。つまり、過去となった王朝時代の和歌遺産を規範として意識し、それを基にして新たな創造を図ろうとする表現様式だと言うのである。それは、和歌の主題や構想はすでに歌い尽くされ、新たなものが生み出される可能性がもはやないという、中世の歌人たちの認識から生まれた「伝統の再構成」に基づく手法である。中世和歌は自ずと「型」としての文芸になり、顕著な類型性が見られるのもそれ故である。当然、それは自我意識が優先される近代の理念とは異なり、やはりその時代なりの価値を有すると著者は評価している。

本書は四章からなる。第一章「後鳥羽院における新古今和歌集とそれ以降」は後鳥羽院の和歌の初学期から隠岐配流後の作品まで時代順に考察し、第二章「新古今和歌集直後の諸相」は「建保期」といわれる、新古今和歌集の編纂が終ってから承久の乱までの十年間における藤原定家、土御門院、藤原範宗などの作品や「花実論」の認識を、新古今時代との関連から論じている。第三章「二条為世の時代」は中世和歌の保守本流である為世について、その円熟期と初期の作品及び京極派との接点を含めて考察し、第四章「勅撰和歌集の終焉期」は、前半では飛鳥井雅世による最後の勅撰和歌集となる『新続古今和歌集』の

編纂背景や特徴、及びその子である雅親の勅撰和歌集編纂の挫折などを述べ、後半は『新統古今和歌集』に入選されなかった歌人正徹について論じている。

つまり、中世和歌という山脈の始まり・中間・終りのそれぞれの高い峰を選び、これらのポイントによって中世和歌の脈絡のラインを構成する仕組みである。論述対象の選択は実に興味深い。保守的な二条派と革新的な京極派、中世和歌を確立させた『新古今和歌集』と勅撰和歌集の掉尾となる『新統古今和歌集』、そして『新古今和歌集』の主宰者である帝王の後鳥羽院と『新統古今和歌集』に漏れた市井歌人の正徹、いかにも鮮明なコントラストを為している。しかしこれらのコントラストには、程度の差や表現の違いこそあれ、「古典主義」という共通性が内在されている。

この和歌の「古典主義」を実現させる技法として、「本歌取」の果たす役割は大きい。本著はそれに対する分析に多くの労力を傾注している。同じく古歌の表現を用いて自歌を構成する場合、古歌の世界を背景にするものを本格的な「本歌取」とし、単に古歌の詞のみ摂取するものを、著者は敢えて「コラージュ」という西洋美術の用語を使い、前者と区別している。

著者はその研究方法の特徴について、「できるだけ作品や事象に即した形で具体的に論じてゆきたい」と緒言で語っている。

この「作品に即する」とは、例えば次のような事例が代表として挙げられる。正徹が『新統古今和歌集』に入選しなかった理由は、これまでは將軍義教の忌避という外因によるものとされてきたのに対し、著者は正徹の作品そのものに手掛りを求めている。『前摂政家歌合』における正徹の詠作と一条兼良の判

詞を細緻に分析し、正徹の歌には詞の自由さと、公家の発想との違和があり、宮廷和歌の伝統から逸脱する面を持つことを指摘している。正徹の落選は、その作品の内因にも関連していた可能性があると示唆しているのである。

また「事象に即する」とは、例えば藤原定家への激しい批判が見られる『後鳥羽院御口伝』の執筆時期を、承久の乱以前の京都での作とする説に対する反論という形で為されていることである。著者は当時の権力構造に注目し、建保期の藤原定家は歌壇の指導者的位置にあり、権力の頂点にある後鳥羽院がかくも憎悪を抱いた定家にその任を任せるはずがないと指摘し、『御口伝』の執筆時期を、後鳥羽院による藤原定家へのコントロールが不可能となった隠岐配流以降のものと主張している。

この「作品や事象に即した」姿勢により、中世和歌の懸案の解明に堅固な一歩が踏み進められているのだと言えよう。

第四章の第四節「正徹と新統古今和歌集」は、まず『新統古今和歌集』に最終的に選入されなかったことを知った正徹の玉津島明神への旅から倒叙的に書き始め、それから『新統古今和歌集』の編纂期における正徹の活動を辿り、最後に正徹和歌の特質の検討に入る。正徹の絶望と期待の様子が、彼の歌の解説を交えながら活写され、まるで小説のような構成と筆致である。

第四章の第七節「残照の中の王朝的世界」においては、著者は中世における王朝的世界を美化・観念化する姿勢を説明するため、正徹の内裏諒闇の見学を切り口に鮮やかに論じている。ぜひ一読を薦める味わい深い短編であることを最後に付け加えておく。

(金中)